

措 定 表 現

— 大阪方言を素材として —

山 本 俊 治

はじめに

措定表現というのは、事実の関係を判断措定する言いかたである。その基本的な構文形式としては、

「はしだ(でない) (だろう)」

という形式が、かんがえられる。もちろん、具体的な対話の実際にあつては、「しは」という主題を表現面にうちだしてこないで、

「場」に代弁させるばあいも多い。また、解説部である「しだ(でない) (だろう)」に、措定語(「だ」「です」「である」など、

大阪方言では「ヤ」「ダス」「デス」など)をとるのが普通であるが、それらを表現面にうちださず、形式的には、「ものがたり」表現、あるいは、「性状規定」表現とかわりないものもある。

ともかく、ここでは、その表現機能において、事実の関係を判断

措定すると認められるものをとりあげ、「措定」という表現機能

が、いかなる表現形式をうちだしているかということをみていく。

素材としてとりあげたのは、池田市中心の大阪方言である。

〔註〕 文表現の種別については、佐久間鼎博士に従う。博士は、カール・ビュラーのいう言語の三大機能(表出・うったえ・演述)にもとづいて、構文種別をたてておられる。図示すると次頁の表のようになる。

—

まず、措定語をとった、もつとも基本的と思える言いかたをみる。

○オマイワ | ヤッバリ | オトコノ | コヤ。 (祖父「こうんでも

演述	事象の所見の伝達		対人的はたらきかけ				表面状態の映発	言語機能	
	状況表現	動 作 表 現	発 問	たのみ・すすめ	命 令	よ び かけ			発 言 事 態
	平叙文(いたて文)		発問文		願 望				
しなさだめ文		疑 問 文		質 問 文		間 投 詞			
指 定 文		性 状 規 定 文		疑 問 の 語 詞		問 投 詞		構 文 種 別	
指 定 語		性 状 語 (など)		問いの助詞「か」		動 詞 命 令 形			特 性 的 語 詞

泣かない孫をほめて) おまえはやはり男の子だ。(えらいぞ。)

○オーケナ カネモーケ シタ モン ヤ。(老男→同)た いへんなお金もうけをしたものだ。

○ブリ カーハッタン ヤ。(老婆→家人)ぶりをお買いなさ つたのだ。

○タマニ キタラ イノシシグライ ヤ。(五十・男同士) (さびしいところで) たまにたずねてきたらしいのしじくらしい なのだ。

以上は、指定語「ヤ」をとった単純な指定表現である。

「——ヤ」の言いかたがいねいになると、

○コヨワ ナンニモ ナイ シヨムナイ ムラダス。(五十・男→客)ここはなにもないつまらない村です。

○ソラダ。(五十・男→客)そうです。

○コッチャ ジューエンダ。(五十・男→客)こちらの品は十円です。

というように、「ダス」、その短呼された「ダ」とする。「ダス」・「ダ」の言いかたは、わかい世代にあっては、「デス」にだんだんとかわられつつある。

また、主として、中年以上の婦人において、

○コノ ミチ スート、イタラ ジキデオマス。

(老婦人→客) (学校は)この道をずーつとい つたらすぐでございます。

のように、「デオマス」がきかれる。上品な言いかたである。さらにいねいになると、ときたま老婦人の間に、「——デオマスデゴザイマス」という言いかたがきかれる。

以上、ていねい、ほんざいの別はあっても、指定語むきだしと言いかたは、自己の判断の直接的な表現であり、相手の反応をあまり願慮しない言いかたであるといえる。特にほんざいな「ヤ」むきがしの言いかたなどが、独自、傍白によく用いられる所以である。

つぎに、指定語をとっていないばあい、したがって形式面だけからは、「ものがたり」表現、あるいは「性状規定」表現などと区別がつかないが、その表現機能において、指定表現とみとめられるばあいについてかんがえてみる。

まず「エー」をとった言いかたである。

「エー」は、品詞論のたちばからは形容詞ということになろう。

○この品物は エー。

○あの人は エー。

などいうばあい、これらの「エー」は、「この品物」なり、「あの入」なりの品質、性質、あるいは、そのことへの適否の状態なりをのべたことになる。この点、まさに性状規定表現といえる。

ところが、

○コーシタラ エー。(兄↓妹)こうしたらよいのだ。

と「エー」をつよめていったばあい、そこには単純な性状規定をこえた指定の語気が感じられる。すなわち、前者の「エー」にくらべて、後者の「エー」には、「こうすること」そのことの良否判断をした気持が感じられる。おなじ言いかたでも、「エー」にプロミネンスをおかず、

○コーシタラ エー。

といえ、ば、「こうした」結果の状態判断になり、このばあいは、まさに性状規定表現ということになる。

「エー」の表現機能にみられるこのような二面性は、その反対語

の「わるい」・「だめだ」の表現差がよくものがたっている。

こうしたら エー。 ↑ ↓ こうしたら ワルイ。

こうしたら エー。 ↑ ↓ こうしたら ダメだ。

もちろん、「わるい」も「だめだ」も、ともに性状語である点はおなじであるが、形容詞と、いわゆる形容動詞とでは、その表現性に大きなちがいがみられるのも事実である。いわゆる形容動詞とよばれる語の「ダ」語尾、大阪方言では「ヤ」語尾には、やはり、助動詞「ダ」・「ヤ」にかよう指定力が感じられるのである。

前述の「この品物はエー」も、特に、「エー」をつよめて言え、ば、「この品物は、よい品物なのだ」という指定の言いかたになつてくる。

また、

○アノ ヒトワ タッシャヤ。(老婆独白)あの人は達者だ。

といったばあい、この「タッシャ」は、「あの入」の健康状態をいっただものであり、その点性状規定表現ということになる。が、もし

○アノ ヒトワ タッシャヤ。

というようなたつよめ方をした言いかたをすれば、このばあいの「タッシャ」は、「健康な入」とでもいうように実体視された言いかたとなつて、「達者な入なのだ」という指定の言いかたになる。

この「エー」とおなじような機能をもつ語に、「カメヘン」、「ダンナイ」がある。

○ソコデ カイトカテ カメヘン。(中学・姉↓小学・妹)そ

こで書いてもかまわない。

○オマイワ コンカテ カメヘン。(父↓小学・男児)おまえはこなくともよいのだ。

○ミンナ タベテモテモ ダンナイデ。(老婆↓孫)全部たべてしまってもいいよ。

○ダンナイ ダンナイ。オトリーチャン オコッテモ ダンナイ。(老婆↓父に)しかられて泣いている幼児(いいんだいいんだよ。お父ちゃんがしかってもいいんだよ。)

これら、「エー」・「カメヘン」・「ダンナイ」の反対語が「アカン」・「アケヘン」・「イカン」である。

○ソコイ モタレタラ アカン。(先生↓児童)そこへもたれたらだめだ。

○ソロバンデ スッ トコ ソロバンデ セナ アケヘン。母↓そろばん練習の宿題をしている子(そろばんで計算するところはそろばんでしなくてはだめだよ。)

○ソナ コト ユータラ イカン。(父↓子)そんなこと言っではいけないのだ。

「アカン」・「アケヘン」と「イカン」は通じてもちいられるが、「アカン」・「アケヘン」にくらべて、「イカン」の方は、より語気つよく、一言のもとに断定して、斟酌しない言いかたにより多くつかわれる。

三

つぎに、措定表現で注意すべき言いかたに「ネン」とった言いかたがある。

○ワシ ソナイ オモウ ネン。(老女↓二十女)わたしはそう思うんだよ。

○キユーコーガ トリーテ シマウマデマチマス ネン。

(老婆↓孫) (普通電車は)急行電車が通過するまで待つのですよ。

○イマデモ ユートリマン ネン。(五十男↓客) いまでもうおさをしているのですよ。

「ネン」の出自については、「ノヤ」がかんがえられる。「ヤ」が体言または体言的なものにつづくのに対して、「ネン」が用言につづくところに、その出目がよくものがたられている。前述の諸用例における「ネン」には、「ノヤ」という出自はわすれられていても、内包されている「ヤ」の指定性はつよくでている。

○キョウワ ゴジカンヤ ネン。(高校・女同士) 今日(の授業)は五時間なのよ。

○ヒー イッパイ ハタラク トコダン ネン。(五十・男↓客) (この地方は)朝早くから晩おそくまではたらくところですよ。

○ニセンアマリザン ネン。(五十・男↓客) (人口は)二千人あまりですよ。

○モー ニネンメデス ネン。(三十・女同士) もう二年目ですのよ。

などの諸例にみられる「ネン」は、「ヤ」・「デス」・「ダス」などの措定語につづいている。これらの「ネン」には、それがひとまとまりのものとして用いられているうちに、それ自身のなかにふくまれている措定要素はわすれられ、その語気が、念をおし、つよめる気持にかえられて、はつきり「文末助詞」として熟成しているこ

とがうかがえる。「ヤ・ネン」・「ダス・ネン」(「ダン・ネン」)・
「デス・ネン」(「デン・ネン」)、さらにていねいになると、「デ
オマス・ネン」(「デオマン・ネン」)・「デゴザイマス・ネン」
〔「デゴザイマン・ネン」〕など、いずれも、きわめてつよい措定の
しかただといえる。

「ネン」が、措定語「デス」・「ダス」・「ヤ」などともに用
いられるばあい、体言または体言的なものにつづくときは、前述の
ように、「デス・ネン」・「ダス・ネン」・「ヤ・ネン」などのよう
に、措定語に下接する形をとる。しかし、用言につづくときは、
「ネンヤ」と「ヤ」のみに上接する言いかたをとる。

○ボクカテ イク・ネン・ヤ。(男児↓家人) ぼくもいくのだ。

○ソナイ オモウ・ネン・ヤ。(五十・男) そうおもふのだ。

○コレガ エー・ネン・ヤ。(中学・男同士) これがよいのだ
よ。

このばあいの「ネン」には、前述の措定の気持をつよくうちだした
「ネン」、念をおし、つよめにつかわれる「ネン」とはまたちがっ
た機能が感じられる。

「ネン・ヤ」という形がある以上、「ネン・ダス」・「ネン・デ
ス」という形もあつてしかるべきだと思われるが、実際にはそのよ
うな言いかたはしない。そして、「ネン・ヤ」に相当するていねいな
言いかたとしては、たとえば、「イク・ネン・ヤ」を例にとると、

イクン・ダス。

イクン・デス。

イキマン・ノン・デス。

などがかんがえられる。とすれば、「ネン・ヤ」の「ネン」は、てい

ねいな言いかたをしたばあいの、「ン」・「ノン」に対応するとか
んがえられる。前述のように、「ネン」は、「ノ・ヤ」からでたとお
もわれるが、その内包する「ヤ」の措定性に重点をおいたばあい
が、「イク・ネン」の「ネン」であり、「ノ」の表現効果に中心を
おいたのが、「イク・ネン・ヤ」の「ネン」になるのであろうとか
んがえられる。「ヤ」が体言または体言相当格につづくという原則
からも、このばあいの「ネン」が「ノ」または「ノン」相当のもの
であることが容易にわかる。といつても、「イク・ネン・ヤ」・「イ
ク・ノン・ヤ」と、「イク・ネン・ヤ」をききくらべたばあい、後
者に、よりつよい措定の気持が感じられるのはもちろんである。こ
こに、その出自かよくものがたられているし、その故にこそ、てい
ねいな言いかたには、「ネン・デス」・「ネン・ダス」などのよう
な言いかたがもちいられないのであろうとおもわれる。

四

つぎに、ある種の文末助詞で、その表現効果のいかんによって、
措定の機能をうちだしてくるばあいがある。以下それらについてか
んがえる。

〔ワイ(こ)〕

○シラン ワイ(こ)。(中学・男同士) (知らないといったら)

知らないんだ。

○モー タベテ シモタ ワイ(こ)。(男児↓家人) もうたべて

しまつてないんだ。

○オカーチャンニ シレテ イテ モラウ ワイ(こ) (男児↓家
人) (ぼくは) おかあちゃんにつれていってもらうんだ。

「ワ」文末助詞本来の機能は、自己の判断、情意中心に見聞したところを主張するところにある。この点、ナ行文末助詞が相手に眼をむけ、よびかけていくのとは、反対の極に立つ言いかたである。

たとえば、

あの先生 コワイナ。

といえ、「あの先生」の「こわさ」とともに経験した相手によびかけて、その賛成をもとめる言いかたになるが、

あの先生 コワイ。

といえ、「あの先生」の「こわさ」を相手が経験しているのにかかわらず、自己の、その経験判断を中心に、こうこうだとつたえた言いかたになる。同様に、「嫌や ナー。」といえ、相手の嫌悪の情によびかけた言いかたになるが、「嫌や ワ。」といえ、相手の気持はともかく、自分の嫌悪の情の表明になる。

このような、自己の判断、情意中心の内向き言いかたである「ワ」の表現機能が、自己に関する言動の表現文をうけて強調され、「ワイ(こ)」というような形をとつてくると、その事実に対する自己の判断、情意が正面におしだされて指定の言いかたにすれていくとかんがえられる。

〔デ・ド〕

「デ」・「ド」はともに、自分の見聞、意思を相手につよく主張する言いかたにつかわれる文末助詞である。

○ソヤケド アノ ヒトワ クワシイ コト シッタハッ。ド。

(青年・男同士) だけど、あの人はくわしいことを知っておられるゾ。

○モートリーニ イキヨッタ。ド。(青年・男同士)

もうとつくにいきおったゾ。

○キョーヒルカラ アメ フッカモ ワカレヘン。デ。(青年・男同士) きょうはひるから雨がふるかもしれないよ。

○センセ ドツカイ イカハッタ。デ。(女学生同士) 先生はどこかへいらっしやったよ。

○アンナ ギョーサン ハナ アッタン シリマヘン。デ。(老妾同士) (お葬式に) あんなにたくさん供花のあつたのはみたことありませんよ。

など、いずれも「ド」・「デ」文末助詞本来の表現機能においてつかわれている例である。「ド」は品位低く男ことばとして、「デ」は「ド」よりは品位高く、男女ともにつかうというちがいはあつても、自己の見聞、意思の強調という点ではおなじ効果をもつ。

この、自己の見聞、意思を主張する言いかたが強調されると、これらに指定の語気が生じてくる。

たとえば、前例の、

○ソヤケド アノ ヒトワ クワシイコト シッタハッ。ド。(青年・男同士)

○センセ ドツガイ イカハッタ。デ。(女学生同士) なども、「ド」・「デ」の語調をかえることによつて、「あの人はくわしいことを知っておられるゾ。」・「先生はどこかへいらっしやったよ。」という言いかたから、「あの人はくわしいことを知っておられるのだ。」・「先生はどこかへいらっしやったのだ。」という言いかたになつてくる。

〔モン・トトロト〕

「モン」・「トトロト」はともに名詞系の文末助詞である。前述の

「ヂ」・「ド」とおなじように、自分の見聞、意思を主張する言いかたにもちいる。

○ソナ ヌイタカテ ツコテ シモテ ナイモン。

(女学生同士) そんなことを言ったってつかってしまつてないもの。

○オカーチャン ナンニモクレヘンモン。(幼児↓母) おかあちゃんはなにもくれないんだもの。

○ワテモ イク トコト。(老婆↓娘) わたしも行くつたら。

○ハヨ オイデ トコト。(老婆↓娘) はやくおいでつたら。

「トコト」は主として、五十才以上の世における女ことばである。これら名詞系の文末助詞は、前述の「デ」・「ド」にくらべて、いっそう自己中心の言いかたである。この点が強調されると、これらの言いかたに措定の気持が生じてくる。すなわち、前例の言いかたも、「モン」・「トコト」を強調すると、「そんなことを言つたって、つかってしまつてないんだ。」・「おかあちゃんは、なにもくれないんだ。」・「わたしも行くつたら行くんだ。」・「はやくおいでつたらくるんだ。」というようになつてい措定の言いかたになる。

以上あげた「ワ」・「デ」・「ド」・「モン」・「トコト」などは、いずれも自己の見聞、意思を主張する自己中心の内向きの言いかたである。この点、おなじように強調する言いかたではあつても、「ナ行文末助詞」、代名詞系文末助詞の「ソ」・「エ」など、相詞の「シ」・「ヤ行文末助詞」の「ヤ」・「ヨ」・「エ」など、相手によびかける外向きの言いかたとは、おむきをことにする。

このような自己中心の内向きの言いかたが強調されると、そこに

措定の語氣が生じてくるといえる。

五

つぎに、言いさしの表現態に注目してみる。

○イヤ ヌイテモ シヤナイシ。(老婆) いやだといつても

しかたがないし、…。

○オカネ ナンボ ムンデ モロタカテ。(老婆) おかねをい

くらつんでもらつたつて、…。

○ソテ ゴツイ イエヤ ヌイタラ。(老婆) それは豪壯な邸

宅だといつたら、…。

これらは、いずれも言いさしの表現である。言いさしということ、途中までのべて、あとは言わずもがな、一挙に相手の了解にもちかける言いかたである。このような表現効果を逆用すると、「おわりまでいふ必要はない、…なのだ」という強い措定の効果をうちだしてやる。たとえば前例でいうなら、語調のいかによつては、「いやだといつても、それはそうするしか、しかたがないんだ。」・「おかねをいくらつんでもらつたつて、できないものはないんだ。」・「それは豪壯な邸宅だといつたら、ほかにくらべるものがないくらいなんだ。」というようにな言いかたになる。

この言いさしの言いかたが、つぎのように「テ」・「ト」など特定の接縮助詞をとつた言いかたになると、語調によりさらにつよ措定の言いかたになる。

○カドノ ミセニ ヤスイノン ウツテルテ。(娘↓母) 角の

お店に安いのを売っているつて、…。

○オジーチャンモ キヤハルト。(母↓子) おじいちゃんもい

らっしゃるんだって、…。

接続語は、その性質上、叙上のことからをしつかりおさえて相手にもちかける効果になうが、特に「テ」・「ト」の言いかたにその傾向がよよくみられる。出目からくるニュアンスといえようか。この機能がよいよつよめられてくると、これらが、接続助詞から、文末助詞として転成していく契機となる。このことは、他の言いかたの言いかたが、相手関係をつよくちだす「ナ行文末助詞」などをとって、いっそう相手にうったえる効果をあげていくのに対し、「テ」・「ト」で言いかたには、そのように他の文末助詞をさらに下接することがない点からもかんがえられよう。

「テ」・「ト」のこのような表現機能が強調され、語調も「テ」「ト」というように下降調子につよめられると、表現面下に沈められた「……ということだ」、「……というのだ」などの判断の気持が内包されて、これに措定の語気が生じてくる。つぎのごとくである。

○オトーチャンガ、モッタハル。テ。(母→子) おとうちゃん
がもつてなざるって(いうんだよ)。

○コツチャ。テ。(中学・男同士) こっちだって(いうんだよ)
○ソラ。ソヤロ。テ。(中学・男同士) それはそうだろうって、
(それにちがいないんだ)。

○コレガ、センエンヤ。ト。(老婆) これが千円だと(いうんだよ)。

○ボクモ。イク。ト。(老婆→嫁) (こどもが) ほくもいくとい
っているんだよ。()

六

最後に、テンスに関係のある表現態についてかんがえる。

○シューセン。ナツテ。シナハツ。テン。(二十・女→母) 終
戦になってからなくなられたのよ。

○ネー。チャンノ。トキト。ダイブン。チガウ。オモテ。キイテ
テン。(高校・妹→姉) ねえちゃんの(学校) 時代とだ
いぶちがうと思つて聞いていたのよ。

前述の「ネン」が、主として、現在現在のことに関する判断であるのに対して、「テン」は、完了の事実をのべるのにもちいる。前二例はその意味にもちいられた「ものがたり」表現である。ところが、過去の事実、完了の事実、われわれにとつて、たしかな事実である。この「たしかさ」が強調され、転用されると、「テン」に措定の機能が生じてくる。

○コニ。チャーント。オイトイ。テン(妹→姉) ここにちゃん
とおいておいたのよ。

○ホンマニ。ドナイ。シロー。オモテマシ。テン。(五十・女→
夫) ほんとうにどろしりかと思つていたのですよ。
「チャーント」、「ホンマニ」というつよめの語に呼応して、「
テン」がとらえられる。「テン」にプロミネンスをおき、すこし
ながめに発音される。こうなると、これらの「テン」には、よほど
文末助詞としての色彩がつよくなる。

「タ」にも同様の機能がみられる。

○コノ。コトワ。マエニ。ハッキリ。ユートイ。タ。(四十・男→
二十・男) このことはまえにはつきり言つておいたはずだ。

つぎに、やはり、テンスに關係のある言いかたで、「現在時」あるいは「恒時」とよばれる言いかたをとるばあいがある。

○ボクワ イク。(中学・男同士) ぼくはいくんだ。

○ホンワ ヨコニ アル。(妹→姉) 本はここにあるのよ。

相手の言動に関して、この「タ」および現在時の言いかたをとる表現の措定性が方向をかえると、相手の言動をうながすつよい言いかたになつてくる。

○サー ノイタ ノイタ。(先生→児童) さあ、どけどけ

○イラン コトワ ユワントク。(先生→児童) いらぬこと

は言わないでおけ。

また、現在時の言いかたが、自己の言動にもちいられると、つよい意思の表明になることもある。このように、命令表現や、つよい意思表現にずれていく契機に、この種の言いかたに内包されている措定性がよくくみとれるといえよう。(武庫川女子大学文学部)